慶　應　義　塾　　ISSN 1349-6468

福澤研究センター通信

Newsletter of Fukuzawa Memorial Center for Modern Japanese Studies, Keio University

第17号　2012年９月30日 発行

目　次

＊退任にあたって（所長 米山光儀）…… 2
＊福沢研究センター公開講座（橋本五郎氏）…… 3
＊平成24年度 中津市アーカイブズ講座 …… 4
＊日吉寄宿舎調査報告…… 7
＊新収資料紹介…… 9
＊主な動き……10
＊研究活動ニュース……11
＊センター諸記録（2012年４月～ 2012年９月）……12

1937年〈撮影：渡辺義雄〉

2009年

2012年〈撮影：石戸 晋〉

＊ 日吉寄宿舎南寮の改修工事成る ＊

今日、慶應義塾の日吉キャンパス内に寄宿舎があることを知る人は、かなり少ないのではないか。キャンパス南東隅にある日吉寄宿舎は昭和12年の完成で、北寮、中寮、南寮の三棟と、ローマ風呂と通称される浴室棟の、計４棟の建物からなる。シンプルで機能的なデザインが美しい谷口吉郎（1904−1979）の作品で、同年完成の幼稚舎校舎と並び、初期の谷口の代表作として建築史上で高く評価されている。

この寮は、各棟40人を１人１室に収容、行き届いた備品を揃え、洗濯サービス、床暖房、各階水洗便所など、当時としては画期的な環境を用意し、東洋一ともいわれた。なぜ義塾はこれほど寄宿舎に力を注いだのか。それは義塾開塾以来、常に塾と寄宿舎が一体であり続けた歴史に由来する。慶應義塾は単なる学塾ではなく「気品の泉源、智徳の模範」となるのだという全人的な教育思想は、大部分の塾生が寄宿舎で眠食を共にしていた時代があればこそ生まれた考え方である。「わが寄宿舎の歴史は即ち慶應義塾の歴史に外ならない」と日吉寄宿舎開設時の入寮案内にあるのもそのためである。

ところが、この施設が正常に使用されたのはわずかに７年弱。昭和19年には連合艦隊司令部が置かれ、戦後は米軍に接収されてしまった。返還後は中寮のみが寄宿舎としての機能を回復し、他は荒れ果てて廃墟となっていた。

今般、その再生が模索されることとなって、比較的保存状態の良い南寮の改修工事が実施された。ここに中寮の機能が移転し、68年ぶりに学生の生活の場に戻ったのである。他の建物の処置は必ずしも定まっていないとはいえ、日吉寄宿舎は建築から75年を経て、新たな歴史を刻み始めた。（都倉）

退任にあたって

米　山　光　儀

本号が発行される2012年９月30日を以て、福沢研究センター所長を退任することになった。2008年10月１日に就任したので、２期４年の任期であったが、その間にはさまざまなことがあった。

私が就任した時は、ちょうど慶應義塾150年の周年事業が盛んに行われていた時期であり、福沢研究センターは、それらの事業に深く関わっていた。特に、福沢研究センターが編纂する『慶應義塾150年史資料集』（以下、『資料集』）は、20余年にわたる長期計画のものであり、周年事業の域を越えたものであったが、それでも11月に行われる式典までに別巻１として『慶應義塾史事典』を刊行しなければならないということもあり、私が就任した時は、その編纂の最終段階にあった。さらに、2009年１月からは東京国立博物館で「未来を開く福沢諭吉展」が開催されることになっており、その展覧会は、開催地域にあわせて内容の一部を入れ替えて、５月には福岡市立美術館、８月には大阪市立美術館を巡回し、さらに８月から９月にかけて、それとは別の内容で神奈川県立歴史博物館において、「福沢諭吉と神奈川展」が開かれることになっていた。その上、その翌年の2010年は、福沢諭吉生誕175年にあたり、その年に『資料集』別巻２として、『福沢諭吉事典』を刊行しなければならないなど、短い期間で仕上げなければならない事業が目白押しであった。しかし、私の前任の所長である小室正紀経済学部教授がそれらの事業について、周到に準備をしてくれたこともあり、それらの事業を完遂することができた。

それらの事業を行う上で、特に大きかったのは、センターに専任所員が置かれたことである。小室前所長の努力により、福沢研究センターにも専任所員を置くことが許され、私が就任したときには、二人の専任所員がいて、それらの事業を支えてくれた。もちろん、それらの事業は、専任所員だけでできることではなく、『資料集』の編集委員・調査員、センターの事務職員の協力、並びに塾全体のサポートが必要であったが、専任がおらず、兼坦や非常勤だけでは、その実施は難しかったと思われる。専任所員がいない時の所長は、すべてのことに関わらざるを得なかったが、私の場合、専任所員に任せられることも多く、これまでの所長とは異なり、職務としてはずいぶんと軽減されていたように思える。

このように、私の任期の間は、周年事業への関わりが多く、福沢研究センターの日常業務を十分に行うことができなかったのではないかという反省もある。刊行物としては、定期刊行物であるセンター通信や『近代日本研究』の他に、福沢研究センター資料、近代日本研究資料、福沢研究センター叢書を各１冊刊行することはできたが、資料調査や資料整理が滞ってしまったことは否定できない。また、講演会やセミナーなどの開催も、例年よりもその回数が少なかった。これからも『資料集』の編纂は長く続いていくが、日常業務との両立をどのようにしていくのかが、課題であろう。

私の任期中の新事業としては、2010年度より小泉基金から研究補助を受けて、「小泉信三とその時代」の研究を始めたことがあげられる。センターに寄贈されている小泉信三関係資料の整理だけでなく小泉と同時代を生きた吉田小五郎や上原良二などに関係する資料の調査、整理が進められている。さらに今年度には、未来先導基金によって、中津市で行われているアーカイブス講座に大学院生・大学生・高校生を参加させることができ、福沢諭吉を身近に感じてもらう試みもはじまっている。

福沢研究センターは、来年には設立30年となるが、専任所員が置かれるようになってからの日は浅く、まだまだ多くの課題を抱えている。『資料集』の編纂は続くとはいえ、大学として周年事業が一段落した今、福沢研究センターのあり方は、もう一度、考えられてよい。福沢研究センターは福沢諭吉や慶應義塾を視野に入れて、近代日本研究をしていく研究所としての機能だけではなく、すでに日吉・三田キャンパスで行っている学部生や大学院生を対象とした福沢研究センター講座、さらに大阪リバーサイドキャンパスで行っている社会人を対象とした講座など、教育機関としての機能がさらに求められていく可能性も高い。その意味では、一般の研究所とは異なる教育機関としての位置づけがされる必要もあるように思える。今後、福沢研究センターが、研究機関として塾内外に益々その存在感を示していけるようになること、また慶應義塾の中でイベントの時だけに求められる存在でなく、日常的にその存在が感じられるような組織に成長していくことを願い、所長を退任しても、微力ながら、協力していきたい。

福沢研究センター公開講座
「偉大さ」の条件

読売新聞特別編集委員　橋　本　五　郎

１．R・ニクソン『指導者とは』（文芸春秋社）

慶應義塾に入学したときに、兄が『福沢諭吉全集』をプレゼントしてくれた。もちろん全ては読んでいないが、新聞記者になって論説委員になった時に、国会はもっと議論をすべきだということを、福沢の「国会論」を引用して書いたことがある。福沢は、国会は「異説抗論の戦場」であるという。人々の意見が対立するのは当たり前である。意見に違いがあることを前提として、それをどう乗り越えていくか議論していく場が国会である。福沢の主張は考えてみれば当たり前のことだが、今国会できちんと議論がなされているのかといえば、はなはだ疑問である。福沢は後々残るものを書いた。それは福沢の言葉が、いつの時代においても、その時代を考える基準になりうることを示している。

共和党の大統領だったニクソンが書いた指導者論は、自分が読んだ中で最高の指導者論である。ニクソンは指導者を偉大ならしめる必須条件として「偉大な人物、偉大な国家、そして偉大な機会である」と述べている。まず偉大な人物でなければ、他がどのような条件でも偉大な指導者にはなれない。また偉大な国家、偉大な機会は、その時代状況による。

物事を見るとき、重要なのは「鳥の目」と「虫の目」の両方を持つことである。全体を俯瞰的に見る「鳥の目」も必要であるし、また具体的に身近な世界を見る「虫の目」も必要である。明治維新も鳥の目でみれば、武士が政権を得、天皇との間で権威と権力をうまく使い分けてきた体制が660年以上を経て変革した時である。偉大な人物を理解するには、その背景とともに考えることが重要である。

２．『福沢諭吉事典』に見られる福沢像

事典をみると、福沢が様々な活動をしていることがわかる。たとえば大災害の後、いちはやく義捐金活動をして定着させている。寄付活動には顕示欲がつきもので、たとえば10万円では目立たないので10万500円寄付して抜き出ようとするような「寄付金の政治学」が働くものだが、福沢は寄付者名簿を先着順にし、自らの名が埋没することも厭わない。福沢は多方面に活躍した「ルネサンス的万能人」といえる。

３．リアルな状況認識

福沢は『時事新報』論説において、「万能の善政府」などなく、政治とは「悪さ加減の如何」であるという。政治を「悪さ加減の選択」と考える政治的リアリズムは重要である。様々な立場がある限り、万人に「善」である政治などあり得ない。人々はオバマや民主党の登場に過大に期待した。それは無理もないが、問題なのは政権を握った当事者たちが、簡単にできると考えることである。これまでの経緯の中で、問題はそう単純には解決しない。原発問題にしろ、沖縄問題にしろ、消費税の問題にしろ、相対立する考えの中に見いだせるのは、福沢がいうように「悪さ加減」による決着しかない。政治においてはベストの選択がないのはもちろん、ベターの選択さえないという「醒めた認識」が重要である。チャーチルは、「これまで存在したあらゆる政治形態を除けば、デモクラシーは最悪である」と述べた。つまりはもっともマシであるということだが、誰にとっても最善であることはありえないという、福沢と同じ視点である。この視点によって、初めて見えるものがある。また批判を受けながらも、辛抱強く一歩一歩進めなければならないという謙虚な気持ちで、物事に向かうことができる。自分はそのことを福沢から学んだ。

４．状況的・複眼的思考

福沢は時代によって、様々な評価を得る。ぜひ丸山眞男の『福沢諭吉の哲学』（岩波文庫）を読んで欲しいが、丸山は、福沢は状況に応じて主張していくように見えるが、単なる機会主義ではなく、ものを見る軸が存在しているという。それが「独立自尊」である。まず一身が独立することが必要で、そこから家族につながり、国家につながる。25年間塾長を務めた鎌田栄吉は、福沢はコンパスだという。伸縮ができ小さな円も大きな円もかけるが、固着した軸足がある。独立自尊を軸に、国についても家庭についても考えることができる。

新聞記者を42年間やってつくづく思うのは、ジャーナリストに必要なのは「健全な相対主義」である。自分が絶対であると思っていることと、反対のことを絶対であると思っている人があるかもしれないと考えられる余裕が重要である。ただ何でも認めてしまうと、判断や決定ができなくなってしまう。「健全」であることが大切である。また「適度の懐疑論」が重要である。自分は果たして正しいのかと、疑いながら考えることが大切である。時間がたてばたつほど、無意識に真実はゆがめられていく。裏に隠れたこともあるのではないかと考える。しかしこれも「適度」であることが大切である。自分は、世の中のわからないことを調べて読者に示すこと、世の中のいかんともしがたい差異の中で、自ら主張する術をもたない人の意見を伝えることが、ジャーナリストの役割であると考えている。

５．学生諸君に望むこと

福沢は無尽蔵に考えさせてくれるものを持っている。自分なりの関心をもって、福沢を読んで欲しい。文芸評論家の江藤淳さんが、「慶應義塾に入学して肩で息するぐらい勉強したかった」と言っている。肩で息するぐらい勉強するというのは、実にいい言葉である。大学時代は、自分で自分の時間が管理できるかけがえのない４年間である。ぜひとも肩で息するぐらい勉強をしてほしい。

平成24年度　中津市アーカイブズ講座

本年度も８月８日（水）から12日（日）まで、中津市との提携によるアーカイブズ講座が行われた。４年目となる今年は、従来の講座に先立ち、高校生および大学１～２年生向に福沢史跡見学とダイジェスト版アーカイブズ講座を試みた。両講座の日程は以下の通りである。宿泊は８月６日～８日がルートイン中津駅前、８～12日が中津市営の研修施設 八面山荘であった。参加者は前半が高校生４名（塾高２、志木高２）、学部生５名（経済学部３、法学部２）、後半は別府大より37名が参加し福沢研究センターからは調査員５名が参加した。

高校生・大学生向け古文書講座および大阪・中津福沢史跡見学日程

８月６日　8:00　東京駅集合　のぞみ207号
　　10:33　新大阪駅着

【大阪市内史跡見学】
福沢諭吉生誕地・大阪リバーサイドキャンパス・大阪慶應義塾跡・緒方洪庵の墓
　　15:09　新大阪駅発 のぞみ33号、ソニック41号
　　18:11　中津駅着

８月７日　9:00　開校式　於福沢記念館会議室
　　中津市教育長・福沢研究センター所長挨拶・参加者紹介

【中津市内史跡見学①】
福沢諭吉旧邸および福沢記念館・明蓮寺・独立自尊の碑（中津城）・耶馬溪・競秀峰・耶馬溪風物館・昼食・羅漢寺
　　15:00　尾立和則先生講義
　　「資料の保存や修復技術について」

【中津市内史跡見学②】
村上医家史料館・夕食（朱華）

８月８日　9:30　①実習（襖下貼り剥し）尾立和則先生
　　②講義（古文書解読）西沢直子教授
　　11:30　閉校式　於中津市立図書館
　　中津市文化振興課長・福沢研究センター教員挨拶
　　12:00　昼食後バスで北九州空港へ移動
　　スターフライヤー 84便
　　16:35　羽田空港着　解散

・中津市アーカイブズ講座日程

８月８日　13:30～17:00
　開講式
　市長および別府大学アーカイブズセンター長挨拶
　講義①　丑木幸男教授（別府大学）
　　「アーカイブズとアーキビスト」
　講義②　西沢直子教授（慶應義塾福沢研究センター）
　　「福沢諭吉と中津」
　講義③　針谷武志教授（別府大学）
　　「写真・マイクロフィルム撮影の基礎知識」

８月９日　9:00～17:00
　講義④　尾立和則氏（元京都造形芸術大学教授）
　　「襖の保存と解体について」
　整理・目録作成実習

８月10日　9:00～16:15　整理・目録作成実習
　　18:30　学生親睦会 於八面山荘バーベキューハウス

８月11日　9:00～17:00　整理・目録作成実習

８月12日　9:00～12:15　整理・目録作成実習
　　12:15～12:20　閉講式 中津市教育長挨拶

参加記

中津市アーカイブズ講座に参加するのは今回で三度目であるが、初日から参加したのは今回が初めてであった。今年から、アーカイブズ講座の開講に先立って実施されることとなった高校生・大学生向けの福沢史跡見学にも同行したので、中津にはちょうど一週間滞在したことになる。福沢史跡見学では、豪雨の被害に見舞われたばかりの耶馬溪を訪れるという貴重な経験をすることができた。まだ被害の爪痕が所々に残っていたものの、山国川が水害のことなど忘れたかのように悠々と流れているのが印象的だった。アーカイブズ講座では、昨年同様、グループに分かれて襖の下貼り文書の目録を作成した。ヴォルフガング・ミヒェル先生（九州大学名誉教授）による講義と福沢記念館の見学の時間が今回はなくなり、史料実習の時間が２時間増えたことで、多い日には一日40点以上の史料を整理することができた。内容は中津藩の人間関係を伝える手紙が多かったが、最終日には講座がこの

まま終了してしまうのが惜しく思われるほど、参加者たちは熱心に作業に取り組んでくれていた。もっとも、後日東京で行った反省会によれば、史料実習が延々と続いたことで学生の緊張感がうまく持続しなかった班もあったようだ。私が担当した班でも、はじめはTA１人に対し班員が８名（最終的には６名）いたので皆の作業を見て回るのに少し困難を感じることもあった。TAが自ら作業しつつ、学生にアドバイスできる人数は５～６名が限度なのではないか。講座に参加する別府大学の学生たちも同じ大学の所属とはいえ、講座の前には互いに面識がない場合が多いようなので、グループの人数を適正に保つことは相互の交流を促進するためにも重要なことではないかと思う。（堀 和孝）

今年の講座は例年以上の受講者が集まり、福沢家襖下貼り文書の史料目録も思いのほか進み、非常に充実した会となった。整理した史料の内容は、金銭出納帳が大半を占めていた他、中津藩の人間関係を伝えるようなものや、女手による手紙、断簡もあり、中津藩の藩士であった福沢家の生活の一断面が垣間見えるような気がした。

また、今回、整理にあたった史料は、襖の下貼りであったことから、劣化が甚大なものも多いように思われた。そのため、こうした史料の保存や管理・劣化の防止は、今後の課題であろう。

冒頭では、丑木幸男先生のアーカイブズについての講演・西沢直子先生による中津藩についての講義があり、本講座で扱う史料の背景を理解するよう努めている学生の姿が多く見られた。

あわせて、今年も尾立和則先生（元京都造形大学教授）による襖の下貼りを剥がす実習のほか、針谷武志先生（別府大学教授）による史料撮影の実習が行われた。二つの実習では、学生自身が積極的に取り組んでいたため、充実した時間になったものと思われる。とりわけ、襖の下貼りを剥がす作業については、学生達にとっては未体験のことであったため、戸惑いながらも楽しそうに作業を進めている姿が印象的であった。

今回の実習では、三年目ということもあり、福沢研究センター・別府大学それぞれのTAの連携もあり、緊張感の中にも楽しく作業ができたことは、大きな収穫であった。来年度の実習でもTA同士の連携を念頭において作業していきたい。（大庭裕介）

８月８日～12日に中津市で行われた古文書講座に参加した。例年通り８日の午後から講座は始まった。初日に講義とレクチャーを終えると、二日目以降は全体を１グループ８人程度の６班に分け、班ごとに実習を行った。作業は古文書の目録作成、襖の解体・下貼り文書剥がし、写真撮影の３種類で、各班がすべての工程を経験できるようにローテーションを組んで回した。私の班は二日目、三日目はひたすら目録作成に取り組み、四日目、五日目で襖の下貼りや写真の実習を行った。

襖は中津藩の竹本家で使われ、維新後は医者の大江家に移されたものを使用した。従って、古い層は竹本家、新しい層は大江家で仕立てられたことになる。作業の目的は襖の原状を記録しながら下地に使われている古文書を一枚一枚剥がしてゆくことである。そのためにまず全体の写真を撮り、次に文書が張られた順番に注意しながらスケッチをして記録をとる。そして最後にのりづけされている文書を剥がすと一つの層の作業が完了する。こうすることで襖を仕立てた当時の作業工程を復元することが可能となる。襖の下地は複数の層から成り立っているので、この作業を各層ごとに行った。

写真撮影を行った史料は、昨年度の実習で解体した屏風の下貼り文書で、中津藩奥平家の菩提寺として知られる自性寺のものである。文書を鮮明に撮影するためにカメラの設定をマニュアルで決定する方法について最初に説明を受けた。会場の光の数値を測定し、それに応じた絞り値とシャッタースピードを確定することになる。文書は静止物なのでシャッタースピードはゆっくりでよく、その分全体のピントが合うように設定することで写真の明るさや鮮明さが均一になるようにした。

このように襖を解体して下貼り文書を一枚一枚に分け、それを撮影して記録をとり、目録を作成するという一連の作業を経験することで、全体像を把握しながらそれぞれの作業を進めることができた。このおかげで効率良く実習を行うことができ、理解もしやすかったと思う。

なお、講座の期間中、学生は中津市の宿泊施設で合宿生活を送った。施設は市街地から少し離れた丘の中腹にあり、講座の期間中は貸切になる。そのため学生同士の交流時間も自然と多くなり、さらに施設内でバーベキューを楽しむ機会もあった。講座自体はみっちりと日程が組まれていたが、こうした適度なあそびが勉強疲れを起こさせないアクセントになっていて、５日間メリハリのある生活が送れた。（横山 寛）

「古文書講座」および「アーカイブズ講座」に参加して

慶應義塾女子高等学校　社会科教諭　結　城　大　佑

今年度から設置された高校生・大学生向けの「古文書講座および大阪・中津福沢史跡見学」と、以前から行われている「中津市アーカイブズ講座」に参加させていただいた。

「古文書講座および大阪・中津福沢史跡見学」には、女子高の日本史担当教員として参加し、その内容を女子高生に紹介するという役割もあったが、自分自身が面白く学ばせていただいた。この講座の魅力は、現地で体験するからこそ学べる事柄が多く盛り込まれていたことにあると思う。印象に残った点は多々あるが、字数の許す限りで挙げてみたい。

例えば、大阪で外せない福沢関連史跡のひとつに適塾があるが、適塾はどのような場所に建てられた学塾なのか、見学の際にはその立地を考えることも提案されていた。すなわち適塾周辺には同時代に懐徳堂があって、いわば学問的ムードが漂う地域であり、少し時代が下れば愛珠幼稚園が移転してくるなど、教育というものを感じさせる地域でもある。そういった地域の雰囲気は、諸施設を歩いて回ることでこそ強く実感できるものであり、参加者にとってまさに体験学習となっていた。

中津では当地歴史民俗資料館の方々にご協力いただいて、多くの史跡をスムーズに見学することが出来た。本企画のメインでもある古文書講座では、まず下張文書の保存に関するセミナーが行われた後、実際に下張文書を剥離する作業と古文書を解読する作業が並行して行われた。ただ剥がすだけ、ただ古文書を見るだけではなく、尾立先生や西沢先生が剥離の手法や古文書の背景を逐一丁寧に教えてくださったため、参加者に馴染みのない作業も親しみやすくなっているように感じた。何よりも、歴史がどういったものを使って研究されるのか、史料がどのように見つかるのかといった、歴史研究の手法の一部を体験しながら学べるのが、高校生や史学専攻以外の大学生にとって有意義だったと思う。

また今回の講座には高校生が四名、大学生が五名、引率者が大学および一貫校から五名参加した。さらに中津の高校生五名も参加しており、バラエティーに富んだ人数構成になっていた。普段接点のない方々とコミュニケーションをとれるのは刺激的で、この点もぜひ女子高生に紹介したいと考えている。なかでも中津の高校生とコミュニケーションをとれるのは、交友関係が慶應関係者に偏りがちな一貫校の生徒にとって、普段知らない環境に触れるいい機会だと感じた。

「中津市アーカイブズ講座」では、諸先生方のセミナーを受講させていただいた上で、下張文書整理作業の各手順を３日間に渡って見学した。

この講座では、下張文書の剥離→写真撮影→文書解読という一連の作業工程それぞれを、専門の先生方やTAの方々が付きっきりで指導してくださり、しかも少人数で実習が行われていたため、率直に贅沢な講座だと感じた。さらに参加者はセミナーで聞いたことをすぐに実践に移せるため、体全体でアーカイブズについて学べる仕組みになっていた。

ところでこの座学と実習のつながりは、重要なものだと思う。そもそも学校の授業では座学が多く、自ら体を動かして知識を得る実習形式の授業は少ない。実習の機会があっても、座学での知識が実習に生きているかと言われれば、不十分な時も少なくない。反対に、実習のための座学が足りない時もある。このような時に思うのは、座学と実習を同時に行うことができればさらに理解が深まるだろう、ということである。そういった意味でこの「中津市アーカイブズ講座」では座学と実習が同時に、しかも充実した内容で提供されていたため、アーカイブズ関連の本格的な作業をはじめて体験する人にも理解しやすくなっていたと思う。

以上、「古文書講座および大阪・中津福沢史跡見学」と「中津市アーカイブズ講座」の魅力を、自分なりにまとめてみた。両講座を通じて改めて実感したのは、当たり前のことではあるが、体験することの重要性である。あるいは、体験すると理解が深まるということである。私が女子高で担当する日本史においては、過去の出来事をいま体験することが出来ない以上、座学が中心の授業になりがちである。ただその中でも、あたかも歴史を体験しているかのような歴史の具体的なイメージを生徒に伝えられるよう、工夫しなければならないと痛感している。この経験をもとに授業を見直し、女子高生には「体験すること」を積極的に促していきたい。

日吉寄宿舎調査報告―悲運の名建築が辿った歴史―

都　倉　武　之

昭和12年に完成した日吉寄宿舎は、昭和19年から海軍、終戦後は米軍に使用されて荒廃、北寮・中寮・南寮・浴室棟の４棟中、中寮以外は廃墟化していた。

昭和18年頃の南寮と庭の櫟

平成22年、慶應義塾は安全面・機能面・財政面から寄宿舎の再構築を検討し、南寮と浴室棟を改修、中寮と北寮は取り壊すという整備計画を立案、これを吉田鋼市氏（横浜国立大学）を座長とする諮問委員会に諮った（筆者も委員として参加）。委員会は昨年３月、南寮をできる限り当初の外観に復元すること、４棟の一体性を重視し、中寮・北寮も保存活用を模索すべきことなどを答申。義塾ではこれを踏まえてまず南寮改修を実施、本年４月には中寮を一旦廃し南寮の使用を開始した。さらに横浜市は南寮･浴場棟を歴史的建造物に指定、寄宿舎の再評価の動きが加速している。

福沢研究センターでは、塾史上の寄宿舎の重要性と、日吉寄宿舎の辿った歴史を記録すべく、平成21年６月29日（アートセンターと合同）、平成23年９月29日、平成24年９月10日の３度にわたり寄宿舎の内部調査を実施したのでその概略を報告したい。

寮生の痕跡

今回の調査では、創建時から各個室にあった洋服タンス内に、多くの落書きが確認された。中寮では、75年間の落書きが混在している。ここでは昭和20年以前の記入と確認できるものの一部を紹介しておきたい。

- **この室を愛するもよし愛せぬもよし　たゞ君の真摯なる道場とせられよ／昭和十二、九一十四、三　赤平栄三（秋田）**〈北308（北寮308号室の意。以下同）〉
- **確固タル人生観ヲ創リ給ヘ（石橋生）**〈北302〉

これらは日米開戦前のものである。赤平氏は隣室の寮生が寄宿舎の五十周年記念誌に想い出を寄せており「無口でおとなしい、遠慮勝ちの人」で試験前は皆が「赤平詣で」する、成績抜群で敬愛を集めた人物だったという。どの落書きも筆で直接書かれている中、赤平氏だけは紙片にペンで記し、端っこに慎ましやかに貼っていた。いかにも回想に語られている人を思わせる。

太平洋戦争突入後は戦争を感じさせるものが多い。

- **日本英米に宣戦す　銘記すべし／昭和十六年十二月八日**〈中309〉
- Welinton's and Washington's boy can't, but Togo's boy can stand up **／勝利　平八郎**〈中208〉

前者は端正な楷書で大書されており、緊張感を帯びている。後者は間違いを抹消している箇所もある殴り書きで、「平八郎」というのは東郷元帥の揮毫風に戯れたのだろう、花押らしいものも添えてある。両者は随分対照的だ。時期は不明だが外国語のものがもう一つあった。

- Was in der Jugend uns verirrter Alltag ist, erscheint uns später wie ein Märchentraum.〈中213〉

ドイツ語で「若き日の我々を惑わせているものは、時がたてば、やがて夢まぼろしとなる」という意味だ。

次の落書きは大作で、とりわけ印象に残った。

- **思ひ出は湧きて尽せじ二本の櫟の本にあかねさす時／昭和十九年九月二十日　海軍予備生徒入団奥津透／祖国勝利之日再び学之殿堂となるを信じて　海軍に明け渡しの日**〈中212〉

署名の奥津氏は、前述の五十周年記念誌に落書きのことを次のように回想している。

> **多分うす汚れてしまい、幼稚ないたずら書きとしか見えないことであろう。当然のことである。それは四十数年も昔のことである。今、何の意味もないのは当然である。いやその時ですら書いた人以外には意味のないものであった。また書いた人自身も忘れてしまった忘却の彼方に埋没したことでもある。それらは昭和十八年と十九年に学徒出陣とか徴兵と言う名の下に寮を去って行った者達が書き残した名前なのである。二十歳前後の年頃であったろう。娑婆に居られるのはあと何日と数えて過す夜、僅かな酒の勢いを借りて書いたものである。こめられた思いはそれぞれであったろう。だが他人が窺い知るような、なまやさしいものではなかったろう。**

奥津氏の落書きにある「櫟」は、庭の各所に植えられた日吉寄宿舎のシンボルである。その櫟の木を歌い込んだ落書きが他にも目に付いた。

- **思ふこと数多あれど黙してぞ寮庭の櫟に語れと告げむ／平賀雅晴　昭和十九年九月十五日　さらば懐しの寮よ**〈中207〉
- **夕去れば煙草火焼けつ赫々に庭の櫟に思ふことなし／昭和十九年九月十五日　藤居喜一郎　寮最後の日**〈中213〉

この二人の歌は呼応している。前者には、こう書き添えられていた。

> **若かったのでそして希望にみちていたので彼は如何なる外的事情の組合せによって希望を挫かれる事を拒んだ。運命そのものによってさへも。**〈中207〉

哀惜の情にじむ落書きはまだまだある。

- **昭和十八年十月　淡路絖一郎／寮より戦場へ征く　後の諸君 " 文化は日吉より " の言を生かして呉れ**〈中313〉
- **おゝ世紀の足音がきこえる。なつかしの部屋心のふるさと栄あれ!／昭和十八年高堂信吉**〈中311〉

タンスの落書き（左：中寮309号室／右：同313号室）

ところで、南寮は海軍の高官が入ったため拭われたか、半世紀以上の直射日光が消し去ったか、寮生個室に落書きは全くなかった。唯一、元は宿直室だった1階隅の部屋のタンスに次の墨書が残っていた。

- **さらば南寮　心の我が家よ　今別離にのぞんで感無量　涙もて我は去りてぞ行くさらば／南寮最後の日**

最後に、戦死した寮生の落書きを記しておく。

- **健やかに進め／第一代　瑞山貞次**〈北301〉
- **"寮は人間修養の道場也"／昭和十六年三月記之　第一回寮生 伊東秀雄**〈中217〉

海軍時代の痕跡

司令長官室跡と推定される場所（南寮2階）

海軍への寄宿舎貸与は契約上昭和19年9月21日である。寮は、連合艦隊司令部の庁舎兼宿舎として使用された。この時代に特に手が加えられたのは司令長官や参謀長が入居した南寮と考えられる。長官室は2階奥と伝わり、ここには個室4部屋の壁を取り払った空間があり、隣接の2部屋を1室に改めた部屋が扉で繋がっていた。断定はできないが、これがその改装の跡である可能性が高い。そのほか南寮には壁の除去、扉増設が多く見られた。なお、中寮には参謀ら佐官、北寮は尉官が入居し、1階食堂はそれぞれ、南寮が会議室、中寮は作戦室、北寮は診療室になったという。

海軍はこの地下に広大な防空壕を掘削し、今は撤去された出入口は中寮と南寮の間にあった。壕への近道として増設されたらしい扉も、中寮・南寮に確認できた。

米軍時代の痕跡

米軍による接収は昭和20年9月8日のことで、立ち会った塾生によれば米軍は各部屋に海軍が残した備品をすぐ谷に投げ捨てたという。寮は独身士官の宿舎だったと伝わるが詳細は不明で、接収解除は24年10月3日付であった。南寮、北寮壁面には「FIRE HOSE」「FIRE EXIT」という赤字が多数見られる。これは米軍の残したものであろう。タンスの中に1箇所だけ米軍関係の英文落書きが確認できた〈中211〉。「1947」とあり、署名もあるが鉛筆書きで字が薄く、解読は本報告に間に合わなかった。

FIRE HOSEの表示（南寮1階）

この時代の改変は浴室棟に著しい。接収中、浴室がバーラウンジのように使用されている写真があり、円形の展望風呂の浴槽はコンクリートで蓋がされ（埋められてはいない）、天井ドームを支える列柱には、立ち飲み用のカウンターが残存する。また脱衣場の壁面には、星と白頭鷲を象ったマークが付けられていた痕跡が残る。

戦後の使用

〈南寮〉は、昭和29年交換留学生用に改修、以後斯道文庫、生協が使用した時期があった。1階倉庫からは、学生運動関連の遺物が発見された（P11参照）。

〈中寮〉は、昭和25年3月頃寄宿舎としての運用を再開。27年個室2部屋を1室に改装し、3人同部屋とすることとなり、以後3人1室が日吉寄宿舎の伝統となった。机、棚、タンス等、部屋の備品は創建時のものがそのまま多く使われたが、窓のサッシは全て替えられ、外観は3棟中で最も改変された。

〈北寮〉は、昭和26年から大学研究室になった記録があるものの、使用状況は不明。全ての個室が残り、当初の内装も比較的良く残っているが、日陰で保存状態が悪い。1階は会議室、航空部部室として使用中。

〈浴室棟〉は、米軍退去後放置された。ただし学生諸団体が使用し、現在もプロレス研究会が使っている。

以上は、ただの廃墟探訪趣味のように思われるかもしれない。多分それは半分当たっているが、いつ失われるかわからない歴史の現場の面影や、戦中の塾生の声を記録しておくことは無価値ではないと思う。実際ここに記した南寮の状態は、改装により既に失われたのである。

最後に慶應義塾開塾以来の寄宿舎の意義は、今日改めて想起されて良いのではないか（表紙参照）。それを前史として、日吉寄宿舎が存在するのであって突如として谷口の素晴らしい建築が生まれたわけではないのだ。そして、単に独特の秩序が支配する共同生活の場であったならば慶應義塾の寄宿舎である意味はなく、新たな節目を迎えた日吉寄宿舎が、義塾の歴史に裏打ちされた気風を強固にする源として、一層発展していくことを願う。

※本調査の記録撮影は石戸晋氏に依頼し、調査は都倉と当センター調査員横山寛が担当した。

平成24年３月から平成24年８月までの間に、福沢研究センターに収蔵された資料の主なものを紹介します。多くの方々から貴重な資料をいただきましたが、すべての資料をご紹介することができず、申し訳ありません。（物故者敬称略）

福沢諭吉関係資料

■ 漢詩 「蠟燭煌々門未閉　簿書案頭堆如山　塵事忙中談文事　身艱未除憶国艱　迎新人祝長依旧
送旧我祈去無還　一年三百六十日　不得斯生半日閑　君不見宇宙快楽在無知　真成知字是憂患　雪池」 １幅　【購入】

大晦日の夜、蠟燭の灯があかあかとして門もまだ閉めていない。机の上には帳簿のたぐいが山のように積まれている。俗事に忙しい中でも学問のことを口にし、わが身の難儀も払えないのに国の困難を心配しているのが、わたしの生活だ。年が新たになるといって世間の人はもとのとおりに変わりのないことを祝うが、去り行く年を送るに当たって、わたしはこんな年はもう二度と戻ってもらいたくないものだと祈りたい気分だ。一年三百六十日、半日のんびり過ごすことができたというためしはないのだ。見たまえ、昔から今までこの世の快楽はすべて無知に由来するもので、人間というものは文字を知ることがすなわち悩みの始まりなのである。

（『福沢諭吉事典』金文京氏解説）

唯一の古詩で、もっとも長い詩である。今回の入手したものは、これまで知られていた詩とかなり文言の異同がある。新たに知られた語句には、　　をかけた。また書福仕立になっていて箱書があり、「福沢先生真筆タル疑ナシ　大正五年十二月八日　鎌田記ス㊞」とある。

■ 竹添進一郎宛書簡　明治17（1884）年７月12日付　１幅　【購入】

日本に帰国していた井上角五郎が、再度朝鮮に渡ることを決め今日から用意を始めたと告げ、出発前には竹添のもとに参上するので「御差図」を与えてくれるように依頼。また名越時孝の拝謁許可を謝し、この手紙を持参させるので都合がよければ会ってやってほしいと述べる。

名宛人の竹添進一郎は天保13（1842）年肥後国天草群上村（熊本県天草郡大矢野町）に生まれ、維新期は熊本藩に仕えた。明治８（1875）年４月修史局御用掛となり、11年４月以降大蔵省に勤務、13年清国天津在勤領事となり、在任中は琉球問題につき李鴻章と交渉した。15年外務大書記官となり、11月弁理公使として朝鮮へ赴任、在任中の17年12月に甲申事変が起った。18年に帰国し、同年６月公使を免ぜられた。26年外務省を退官。大正６（1917）年歿。

井上角五郎は万延元（1860）年備後国深津郡野上村（現在の広島県福山市）に生まれる。号は琢園。福山誠之館や広島県師範学校で学び、明治12（1879）年に上京。福沢家住み込みの漢学家庭教師となり、慶應義塾にも入学、15年に卒業した。在学中から福沢の紹介で後藤象二郎の秘書役を務め、15年12月朝鮮政府顧問となった牛場卓蔵の随員として渡朝、統理交渉通称事務衙門（外衙門）に出仕した。朝鮮開化派を支援する福沢の連絡役を務めたとされ、16年11月に朝鮮初の近代的な新聞『漢城旬報』を発刊、続いて尽力した19年創刊の『漢城周報』は、初めて漢文・ハングル混合文体を実用化した。明治23年からは落選や辞職をはさみながら大正13（1924）年まで衆議院議員を務め、鉄道や朝鮮政策などで活躍した。そのかたわら、北海道炭礦鉄道会社などの経営に参画、日本製鋼所（現新日本製鐵株式会社）を創立し会長に就任した。昭和13年９月23日歿。

名越時孝は水戸出身の士族で福沢邸に住み込み、慶應義塾で漢学を講じるとともに、福沢家の子供達にも漢学も教えた。自らは慶應義塾で英学を学んでいる。のち水戸中学の漢文教師となった。福沢の長男および次男の留学にあたっては送別の漢詩を贈っている。

発信年は、明治17年２月に『漢城旬報』に書いた「華兵凶暴」が在朝清国軍から攻撃を受け帰国を余儀なくされた井上が、再度朝鮮に渡ることを計画した17年と考えられる。井上角五郎の自記年譜によれば８月に京城に到着した。年末甲申事変によって再び帰国することになるが、以後も19年末まで日本と朝鮮を行き来しながら、新聞の発行などを続けた。

■ 後藤象二郎宛書簡　明治17ヵ（1884）年９月27日付　１幅　【購入】

懇意にしていた後藤象二郎に対して、佐久間（のち武藤）山治が出京しているので、短時間でも逢ってほしいと頼んでいる。

名宛人の「後藤先生」は、後藤象二郎。天保９（1838）年高知藩に生まれ、坂本竜馬と共に藩主山内容堂を説得し、徳川慶喜に大政奉還を行わせた人物。明治政府では要職を歴任、のち民撰議員設立建白書に名を連ねた。福沢との関係は、明治７（1874）年に高島炭鉱が経営難に陥った際、福沢が岩崎弥太郎への譲渡を斡旋した。他にも金玉均の援助や秘書を慶應義塾生が務めるなど、密接な交際を続けた。福沢は後藤を高く評価し、「大のひいき」と公言していた。30年８月４日歿。

佐久間山治は慶応３（1867）年尾張国松名新田村（現愛知県弥富市）に生まれる。父から聞いた慶應義塾三田演説館の話にあこがれ、慶應義塾に入学、17年卒業後渡米して働きながら学び、帰国後武藤家の養子となった。いくつかの会社を経て27年鐘淵紡績株式会社に入社。一度退社するが、41年に復帰して専務、大正10（1921）年には社長に就任した。家族的な温情主義経営で知られ、鐘紡の事業を発展させた。13年に衆議院議員も務め、鐘紡社長および政界引退（昭和７年）後は、時事新報社相談役となった。同紙の政財界腐敗追及記事から昭和９年３月９日、暴漢に銃撃され翌日死去した。

発信年は、武藤家に養子にでる前で、恐らくは卒業後の明治17年か。18年１月にはアメリカへ渡っている。この書簡は書幅仕立になっており、箱書には「福沢翁手簡」「素軒叟観首題」とある。素軒は野村素介。長州藩出身で明治維新後、元老院議官や貴族院議員を務めた。書を能くし、選書奨励会審査長・書道奨励会会頭等も務めている。

■ 中村道太宛書簡　明治22年11月２日付　１幅　【購入】

京阪・山陽への家族旅行（９月16日から10月５日まで）から帰京後、当時流行していた腸チフスを発症した長女中村里の病状を伝える。10月31日から11月１日にかけて重篤に陥ったが、１日を境に快方にむかった。この書簡では熱や脈・呼吸の状態などを告げ昏睡状態を脱した安堵感を「死刑宣告を受けて俄ニ放免せら〔れ〕たる者」の気分であると表現している。

名宛人の中村道太は、天保７（1836）年、三河国吉田（現愛知県豊橋市）で吉田藩勘定方中村哲兵衛の長男として生まれる。江戸詰を命じられて出府中、慶応２（1866）年、鉄砲洲の塾を尋ねたのが福沢諭吉との最初の出会いで、福沢の紹介で早矢仕有的と知り合い、丸屋商社の共同経営者となった。明治９（1876）年豊橋に帰り、第八国立銀行を創設、翌年渥美郡長となる。12年福沢にうながされて上京、大蔵卿大隈重信の信任を得て、13年２月横浜正金銀行を設立、初代頭取に就任した。24年に東京米商会所の仲買人身元金および売買証拠金費消問題が起こった際に、頭取の中村は私財を投げ出して辞任し、以後は社会の表舞台には立たなかった。大正10（1821）年１月３日、東京青山の自宅で歿し、郷里の豊橋に葬られた。

病気になった長女里は、慶応４（1868）年の生まれで、はじめ三といったが、本人の希望で改名したといわれる。琴やピアノが上手で、また英語もスペリングなどは容易に覚えたという。明治16年に福沢の門下生で化学者の中村貞吉（３年６月慶應義塾入学）と結婚、愛作、壮吉の二人の息子が生まれた。高橋誠一郎によれば、兄弟姉妹の中で一番よく福沢の性質を受け継ぎ、「女福沢」と呼ばれていたという。この時は九死に一生を得、昭和20年に亡くなった。

発信年はさとの病気および封筒消印から明治22年と推定される。

■ センター講演会

６月９日に明治維新史学会と共催で東京外国語大学名誉教授稲田雅洋氏による講演会「近代日本政治における演説の力」を演説館で開催した。

■ センター公開講座

昨年に続き、日吉で開講している「近代日本と福沢諭吉Ⅰ」において、ゲスト講師を招き、履修者以外にも公開した。本年度は、６月11日に橋本五郎氏（読売新聞特別編集委員）、６月18日に清家篤塾長、６月25日に池井優名誉教授にゲスト講師をお願いした。（橋本氏の講義概要はｐ３）。

■ 中津市アーカイブス講座

福沢研究センターは、中津市が主催しているアーカイブス講座（古文書講座）に2009年から参加しているが、今年度は未来先導基金の補助により、これまでの中級者以上を対象とした講座だけでなく、初級者を対象とした講座を新たに設置し、福沢研究センターとしてその両方の講座に参加した。初級者対象講座は、高校生４名・学部生５名、引率教員４名が参加し、大阪での福沢諭吉関連史跡めぐりを含めて、８月６日から８日の日程で行われた。中津市の高校生も５名が参加し、地域との交流も深められた。また、中級者以上の講座は、８月８日から11日まで例年のように中津市の小幡記念図書館を会場に行われた。大学院生が２名参加し、福沢研究センター調査員３名がTAとして、また西沢直子教授と都倉武之准教授が講師として参加した。他大学では、別府大学からの参加があった。（詳細はｐ４）。

■ 『慶應義塾150年史資料集』の編集状況

センターで『慶應義塾150年史資料集』第Ⅰ期４巻の編集を同時並行で行っているが、入社帳、勤惰表、姓名録を使って、塾生・塾員の動静がわかる第１巻「塾員塾生資料集成」の編集の最終段階を迎えている。今秋には発刊の予定である。

■ ワークショップの開催

所員の著書の書評会をワークショップとして行った。

７月６日に「西沢直子著『福沢諭吉と女性』を読む」を南開大学の周暁霞氏を報告者とし、研究嘱託の坂井博美氏をコメンテーターとして、７月26日に「岩谷十郎著『明治日本の法解釈と法律家』を読む」を明治大学法学部教授村上一博氏を報告者として、９月24日に「小川原正道著『福沢諭吉の政治思想』を読む」を東北大学大学院の島田雄一郎氏を報告者にして行った。

９月23日に近世近代研究交流会のワークショップを合同で行った。発表者・発表題目は以下の通り。

・加藤征治氏（早稲田大学）
　「死絵と歌舞伎文化 天保改革の再評価」

・志賀祐紀氏　（奈良女子大学大学院博士課程）
　「岡本太郎の「伝統論」に関する一考察」

■ 中央区民カレッジ講座

中央区と福沢研究センターが連携して、中央区民を主な対象者として、講座「近代日本と福沢諭吉」を実施した。

５月14日、21日、６月４日、11日は築地社会教育会館で講義を、６月18日は築地の慶應義塾発祥の地などの慶應義塾関連史跡の見学を行った。

■時事新報関係資料の収集

明治15年に福沢諭吉が創刊した日刊新聞『時事新報』は、昭和11年12月に廃刊となって会社は解散し、題号は『東京日日新聞』に預けられた。その後昭和21年１月に再度時事新報社が設立され復刊、これが昭和30年11月に再び廃刊となって、会社は産経新聞社内に休眠状態となった。

この時事新報社には社史がない。原因は関東大震災による資料の焼失の影響が大きいと思われる。義塾図書館に新報社旧蔵図書が寄贈されているのが唯一のまとまった資料であるが、同社のことを調べる資料はどこにもまとまっていない状況である。当センターでは福沢時代はもちろんのこと、その後も含めて慶應義塾と関係の深い時事新報社に関連する資料の収集を継続して行っている。

歌舞伎俳優肖像（明治26年）

黒田長成肖像（明治30年）

いくつかを例示しておこう。時事新報の附録として配布された錦絵、銅版画、地図などは、龍渓書舎から継続刊行中の縮刷版でもほとんど収録されていない。これらは、ビジネスとしての新聞経営のために、福沢らが工夫を凝らしていたものであって、まとまれば同社の思想や経営実態を探る重要な資料となりうる。例えば誰の肖像画をいつ配布したかは、それぞれの背景を検討する余地があると思われる。

福沢没後の時事新報社が発行していた雑誌『少年』（明治36年創刊）『少女』（大正２年創刊）は、福沢の思想を基盤に教育的な読み物を提供する趣旨で刊行されていた。『少年』は少年誌としてはかなり早いもので、『少年倶楽部』の創刊は11年後のことである。しかしこれも公共図書館で欠号なく収蔵している場所はなく、『少女』に至ってはほとんど所蔵が確認できない。現時点で当センターが収集し得たのは『少年』110冊、『少女』６冊である。

これ以外にも、商人に役立つ情報を提供した『商家之友』（明治35年創刊）、London Times の附録に倣った『文芸周報』（明治39年創刊）、戦後は時事通信社が刊行した『時事年鑑』（大正７年創刊）、漫画家北沢楽天の名を世に知らしめた『時事漫画』（大正10年に日曜附録として独立、『漫画と読み物』『漫画と写真』と改題）、武藤山治社長時代に政財界を取り上げた『時事パンフレット』（昭和８年創刊）など、刊行物は多様である。

もちろん原史料の収集も行っている。福沢諭吉の自筆原稿はいうまでもないが、それ以外で例えば、時事新報創刊40周年の際中華民国より寄せられた祝文（大正14年）、時事新報社新築写真帳（昭和２年）などが近年収蔵された。引き続き収集に努めると共に、お気づきの資料があれば情報提供をお願いしたい。

『少年』と『少女』

■学生運動ヘルメットの発見

別掲の日吉寄宿舎内部調査の際、南寮１階の階段下倉庫から学生運動の旗とヘルメットが大量に発見された。旗は竹竿に巻かれた状態で数十本放置されていたものの、いずれも朽ち果てて、原形をとどめない状態だったため、廃棄せざるをえなかった。ヘルメットも割れたり破損の激しいものが多く、６個が保存された。このうち１個には「中大」の文字があったことから、中央大学大学史編纂課に提供した。

ヘルメット発見状況

収蔵されたヘルメット

全面白色の全学連中核派、白地に赤いビニールテープ１本が巻かれている革マル派のものが混在しており、ここに残されていた経緯には疑問がある。運動に反対する学生が奪取したものの可能性も考えられる。

側面に「M113兵員輸送車／M48戦車搬出阻止」と書かれたものがあり、昭和47年頃のものかと推定される。

福沢研究センター諸記録（2012年４月～2012年９月）

■ **諸会議**

＊平成24年度第１回執行委員会（４月25日）
＊平成24年度第１回福沢研究センター会議（６月12日）
＊平成24年度福沢研究センター第１回運営委員会（７月３日）
＊小泉基金運営委員会（７月19日）
＊『近代日本研究』第29巻第２回編集会議（８月22日）
＊中津アーカイブズ講座反省会（８月24日）
＊ワークショップ
「西沢直子著『福沢諭吉と女性』を読む」
報告者：南開大学周暁霞氏（三重大学留学中）
コメンテイター：坂井博美（福沢研究センター）（７月６日）
＊ワークショップ
「岩谷十郎著『明治日本の法解釈と法律家』を読む」
報告者：明治大学法学部教授 村上一博氏（７月27日）
＊ワークショップ
「小川原正道著『福沢諭吉の政治思想』を読む」
報告者：島田雄一郎氏（東北大学大学院）（９月24日）

■ **人事**

＜事務局＞　新任　池上瑠菜（事務嘱託）　４月１日～

■ **主な来往**

＊塾員清浦奎明氏ほか２名来訪（４月11日）
＊延世大学王賢鐘氏、資料調査のため来訪（４月24日）
＊文学部「博物館実習」受講学生が収蔵庫を見学（４月27日）
＊長崎大学教育学部鈴木慶子氏、大森アユミ氏、版木調査のため来訪（５月７日～８日）
＊法政大学キャリアデザイン学部　笹川ゼミ施設見学（５月10日）
＊塾員横山房子氏来訪、上原家に関して聞き取り（５月16日）
＊桑名市博物館主任学芸員杉本竜氏来訪（５月28日）
＊立命館百年史編纂室 高安英伸氏来訪（６月14日）
＊日本民藝館理事 石丸重尚氏来訪（６月15日）
＊中京大学社会科学研究所東山京子氏、台湾高雄師範大学楊玉姿教授ほか来訪（７月４日）
＊坂城町鉄の展示館学芸員宮下修氏、元坂城町教育長大橋幸文氏来訪（７月10日）
＊近畿大学教職教育部准教授冨岡勝氏、経営学部准教授藪下信幸氏来訪（８月22日）

■ **出張・見学**

＊都倉准教授、柄越非常勤嘱託、東京大空襲・戦災資料センターを訪問、三田の空襲写真閲覧（４月４日）
＊都倉准教授、日吉寄宿舎南寮改修完成披露会出席（４月19日）
＊西沢教授、延世大学国家管理研究院 韓国社会科学研究作業班主催学術研究大会出席のため韓国（４月26日～28日）
＊都倉准教授、横山調査員、史跡撮影のため大阪・京都（福沢生誕地、適塾、大阪慶應義塾跡、洪庵墓ほか）（５月18日～20日）
＊都倉准教授、吉岡研究嘱託、横山調査員、亀岡敦子氏、上原家調査のため長野県安曇野市（５月29日～31日）
＊清野主務、全国大学史資料協議会東日本部会総会に参加のため日本女子大学（５月31日）
＊西沢教授、韓国東洋政治思想史学会延世大学国家管理研究院学術研究大会共催研究大会および日本史学会月例会出席のため韓国（６月21日～24日）
＊西沢教授、福沢旧邸保存会評議員会に出席および古文書講座打合せのため中津（６月26日）
＊都倉准教授、器械体操部創部110年の座談会に出席のため三田倶楽部（７月３日）
＊都倉准教授、横山調査員、義塾関係戦没者関係資料調査のため鹿児島県南九州市知覧町（８月５日～６日）

■ **講師派遣**

＊西沢教授、信濃町の新任職員に「福沢諭吉と北里柴三郎」と題して講義（４月２日）
＊西沢教授、日吉商学部「導入ガイダンス」で「福沢の女性論・男性論」と題して講義（４月７日）
＊都倉准教授、中等部新入生に「慶應義塾で何を学ぶ？」と題して講義（４月11日）
＊都倉准教授、SFC で「濃尾地震、三陸大津波と福沢先生」と題して講義（４月13日）
＊西沢教授、SDMの合宿で「福沢諭吉と慶應義塾」と題して講義（４月14日）
＊西沢教授、福沢諭吉文明塾で「多事争論を考える」と題して講義（５月12日）
＊米山所長、中央区民カレッジにおいて講師（５月14日）
＊米山所長、ウェーランド経済書講述記念講演会で「『修身要領』再考」と題して講演（５月15日）
＊都倉准教授、SFC 中高（中１）にて道徳の授業（５月17日）
＊岩谷副所長、中央区民カレッジにおいて講師（５月21日）
＊平野副所長、中央区民カレッジにおいて講師（６月４日）
＊米山所長、三鷹三田会20周年記念講演会にて「廃塾と存塾の分岐点」と題して講演（６月10日）
＊樽井所員、中央区民カレッジにおいて講師（６月11日）
＊都倉准教授、町田三田会にて「慶應義塾における戦争の時代と戦没者」と題して講演（６月17日）
＊米山所長、中央区生涯学習受講者の見学案内（６月18日）
＊西沢教授、延世大学にて「惑溺と多事争論－福沢諭吉を通してみた西洋文明と儒学の相克」と題し研究報告（６月22日）
＊都倉准教授、The Asian Studies Conference Japan にて「"Civilizationalism" and "Confucianism" of Fukuzawa Yukichi」と題して発表（７月１日）
＊都倉准教授、三田書道会にて「知られざる福沢門下生・門野幾之進　福沢諭吉に刃向かった男」と題し講演（７月14日）
＊都倉准教授、港区立港郷土資料館講座「近代教育と港区２」にて「福沢諭吉と近代教育」と題し講義（７月20日）

■ **その他**

＊日吉西別館にてTLロジコムによる資料の移動（仮置きを本来の場所に移動）（４月４日）
＊平成24年度福沢研究センター設置講座ガイダンス
三田（４月２日）、日吉（４月５日）
＊福沢範一郎君を偲ぶ会（６月５日）
＊福セ南側書庫の窓に紫外線防止フィルムを貼る（６月７日）
＊未来先導基金による中津古文書講座（８月６日～８日）
＊中津市との共催による中津アーカイブズ講座（8月8日～12日）

慶應義塾福沢研究センター通信　第17号

Newsletter of
Fukuzawa Memorial Center for
Modern Japanese Studies,
Keio University

発行日　2012年９月30日　（年２回刊）
編　集
発　行　慶應義塾福沢研究センター
〒108-8345　東京都港区三田2－15－45
電　話　03－5427－1603
http://www.fmc.keio.ac.jp/
印　刷　（有）梅沢印刷所